



[制作記録]

# 「海上のさいはて茶屋」 よしだぎょうこ+KINOURA MEETINGレポート① -地域イノベーション型リレーショナルアートへ Tea House at the Furthest End / GYOKO YOSHIDA+KINOURA MEETING Report ①



よしだぎょうこ YOSHIDA Gyoko (研究代表者)  
神谷 佳男 KAMITANI Yoshio  
浜田 周 HAMADA Shu  
平塚 聖子 HIRATSUKA Seiko  
星野 太 HOSHINO Futoshi  
村山 祐子 MURAYAMA Hiroko  
保井 亜弓 YASUI Ayumi

## 序

現在、本学でも時代を反映して専攻を超え一定数の増加傾向にある、コンテンポラリーアートワークを志す学生の教育環境の保全と整備は、将来的な大学院構想の一端として必要不可欠なことと考える。現在軸にマッチしながら外部に作品を発信していけるプロとしてのスキル、現代のメディアに即した対応力を身につけられる環境作りが求められている。

コンテンポラリーアートに関して言えば、理論と技術とともに成長させ、統合した作品として成立させることの教授は一つの課題ではある。が、作家を養成する教育環境ともなると、更に技術や発想力以外にも実践に必要な数多の能力を鍛え、世界の現在地点でのリアルを視野に入れた受容美学的な側面をも同時に学ぶ、現場での体験研修が必須である。これらは欧米では少なくとも20年以上前から実践されており、大学の授業に組み込まれているため、日本の美術大学を出たものが外に出た時にまずその基礎力の差異の壁に当たる。創作能力如何ではなく、それらをプロデュースする環境の有無で差がつくのは

若い才能が勿体無い。受容美学と自己プロデュース教育を中心とした教育の基礎整備が必要だ。

ゆえに本研究では、コンテンポラリー系の作品をつくる学生が実践的に現場を学ぶ場の創成、現実的に作家を輩出できる専攻を超えた教育環境の創成、授業メソッドの確立をめざす。具体的には、作家との交流／学生のディベートの時間も盛り込んだワークショップ／実践的な展示プロデュース／国際展やアートインレジデンスによるインターンシップ等を施行し、解析可能な記録文献とする。このレポートでは、年度内に編纂する冊子の一部として、先駆けて※①企画記録を報告する。

会場の使用申請、展示計画は、2種類を想定する。具体的には、①団体で組織の中に入り、行動を共にし、発表する ②個人で遠方に行って滞在制作をする、以上をまずは検証対象とする。

①では奥能登国際芸術祭※(2017, 石川) ②では東海さるく(2014-17~, 宮崎) 他を取り上げた。

本年度の実践の過程で、今後の課題を明確にし、観客の受容のあり方やプロデュースアプローチにつ

いて幅広くデータを収集・分析することが中心であるため、活動について詳細に記録する。その結果をもとに、長期にわたり美術系大学における実践的現場型教育研究の成果を授業体系として確立し、社会へ還元することを目的とする。

## ― 「海上のさいはて茶屋」とは

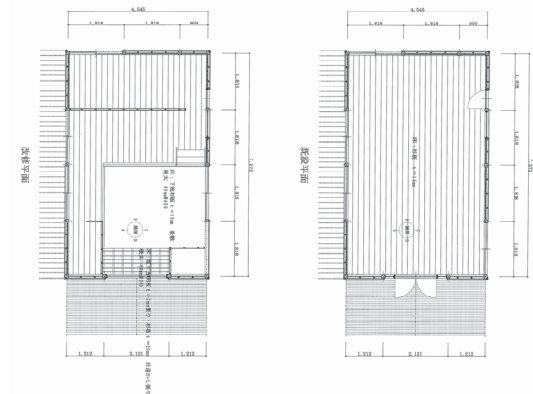
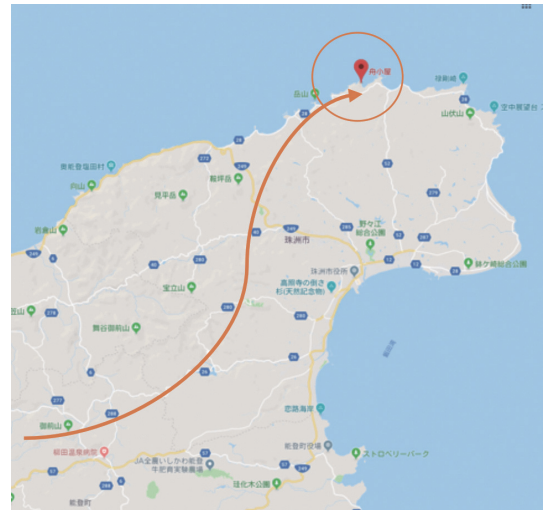
茶室は、15世紀に日本で生まれた、世界で初めての「個人が企画して、価値の定まらないものを作品としてみせ、評価を得る会場」(=ギャラリー)と仮定する。

となれば、千利休は意図的にそれらを集めた最初のキュレーターだ。…このような芸術祭らしい、遊びある私見の解釈をもとに、旧来の様式的な茶の湯ではなく人々が寄り集まる現代の美術作品の会場としてしつらえた。珠洲市の先端エリア区域にある木の浦で野点を連想させる海上の『茶室』として小屋を設定し、アートプロジェクト「海上のさいはて茶屋」としてそこで様々なイベントを行う。

珠洲市の二三味珈琲店の実録をもとにした2015年公開映画“さいはてにてーやさしい香り と待ちながら” (監督：姜秀瓊、主演：永作博美・佐々木希)の映画撮影セット小屋を改築し、ロケ地となった木の浦湾一帯を展開地とした、よしだぎょうこ + KINOURA MEETINGによる、地域イノベーション型リレーショナルアート作品である。県立の自然公園に立つ珠洲市の観光課が管轄する建物で、なおかつ市内でも有数の観光スポット、という難しい条件ではあったが、先駆けて行ってきた地道な3年の取り組みが身を結んだ形となった。

あくまでも中心は、木の浦湾の借景。うるさいほどの海鳴りにかえって静寂を感じ、借景に想いを馳せる孤独の時間を「創る」。これをコンセプトとして、形のないものを最上の創造として「借りる」ために、創作物は極限まで虚飾を抑えること

を全ての作品の軸とした。実際には例えば10月8日の1日で1400人を記録するなど、会期を通して奥能登国際芸術祭全会場の中でも動員数の多い会場となったため、予約制の茶会とした。(図面：新建築事務所/協力)



## \_\_KINOURA MEETINGメンバー構成

よしだぎょうこのディレクションに成るKINOURA MEETINGは、研究チームそれぞれが研究専門領域においてプロジェクト内の役割を自然に適えることのできる金沢美術工芸大学研究者7名と、専攻を越えて全学に開かれている造形演習「現代美術ミクストメディア」のゼミ生、珠洲市地元の協力者、金沢地元の作家および協力者総勢30名超から成る。

本学以外のメンバーでは、珠洲の地域経済を牽引してきた木ノ浦ビレッジ主宰・経済学者澤氏（元 星稜大学 経済学教授）をはじめとして、茶の湯炭産地化を目指す珠洲市地元の炭焼師大野氏。金沢市在住作家及び協力陣として、本学出身の漆芸家 池田氏。金工工房「左右」竹俣氏。安江金箔工芸館館長川上氏（元 本学 芸術学教授）が参加している。





## \_\_主たる企画1～7について

### 企画1 保井あゆみ／神谷佳男（大野長一郎）

科研等を取得しつつ、ワインの澱を使用する17世紀のインクの再現をする研究で長くチームを組んできた保井・神谷両研究室が、チームとして、今回あらたに能登ワインと提携してのインク焼成をした（インク焼成に大野製炭工場）。研究としての価値だけでなく、廃棄物再生利用としてのエコ産業、地域イノベーションの可能性も捉えられる広がり生まれた。



保井／神谷研究室の研究の様子（上記写真一枚のみ、旧年度保井あゆみ研究室より借用転載）



### 企画2 よしだぎょうこ／平塚聖子（神谷佳男）

保井・神谷 両研究室の能登ワインの澱を焼成してできた顔料を日本画の膠で練り、墨に仕上げ、巻物の画材として実際に使用した。

耐久性については不明だが、50日という限定期間だからこそできる実験的コラボレーション作品である。

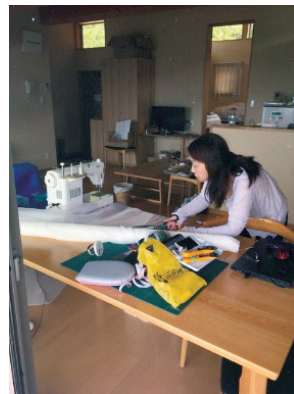




茶室のガラスの床の間より借景を見通すために、シースルーの絹のオーガンディを躯体とし、透明のアクリルの軸に吊るす巻物とした。先の墨によりかそけき線を引いて、さらに、布のよじれをも、グリッドのように筆致のようにミシンによる画として存在させる。

平塚聖子がモデリスタとしての腕を遺憾なく発揮し、ドレーピングした生地をパターン化したり、(あくまで偶然のひきつれのように見えるように)透明の糸で細かいダーツや縫込みを入れるなど、高度な技術を駆使し、互いの共通言語として、粘土などの立体などを用いながら何処を目指しているかの確認を重視した。

コラボレーション作品として完成させる上で、手技を感じさせないように(借景を中心とするために「弱さ」への強度を志向する)完成させる、という作品精度に多くの時間が費やされた。



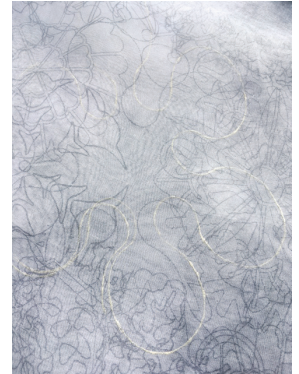
### 企画3 村山裕子 (よしだぎょうこ)

メインワーク「茶会」の茶人カレラ流海の衣装を村山祐子が担当。着物ではなく、村山の友禅のシリー

ズのパターンを使用した、着物を彷彿とさせる現代衣装になっている。生地は、裏地に友禅の着物生地。



生地は、裏地に友禅の着物生地。表地に、北京においてBTAP「新・朦朧主義」展で発表されたよしだの「PAINTING/LAYER\_夕暮」「PAINTING/LAYER\_薄暮」(京都 堀忠染織にて染め、金沢の職人手縫い、雪輪の意匠を意味が崩壊するまで重ねてある。)の作品を使用。衣装の下のカジュアルワンピースも村山のデザインで、サッシュには紺色の着物用の帯ひもがつかわれている。



#### 企画4 炭焼き

石川県唯一の専門製炭業を営む大野製炭工場大野長一郎が茶炭産地化のテコ入れとして全ての炭を引き受けた。

地域イノベーションとして、また炭焼師と現代美術の共通言語のツールとして茶会を用いながら新しい試みを行った。今回は、ガラスの水差しに炭を沈めて使うことや、結界に(高度な技術が要される)皮のまま長く焼かれた炭を使うことも含め、様々な試行がなされた。

大野製炭工場とは2015年から2017年にかけて、林業のインターン経験を通し作品が成立するにおいて美術業界外の多くの助力があって成立すること、様々な交渉のスキルやディベートなどの方法論が必要になることを学生が体験できた。(写真は2015~2017年)



#### 企画5 茶室構築

「海上のさいはて茶屋」の構想/企画はよしだが着想、進したが、竹俣氏/カレラ氏の助力で図面を構成し、設営は地元澤氏の協力によって珠洲市や石川県との連携をとって完成したものである。設計は珠洲市地元建築会社、内装においては日本ダイヤゴム山本取締役による土壁塗り演習を一ヶ月前に希望者に行っていただくなど、多くの方に協力を仰ぐことで完成した。サポート参加することで現場を学びたい学生の人気研修になり、最多人数の参加となった。





## 企画6 アートポールサイン

学生作品として「海上のさいはて茶屋」への海際のアプローチでポールサインを作成した。様々な専攻の学生が、個々の作品を発表する機会を作った。基本構想をよしだが、アイデアの具体化／金属・モルタルの土台製作指導に浜田周があたった。ポールの作品として各自で分けたのは、一過性の参加に終わることを避け、個人名が出ることで学生は履歴にも明記でき、将来の布石としてキャリアを積むことにもなるという判断からである。



卒業後の作家としての現場即戦力を鍛え、多角的な能力育成を助ける、新しい形の教育メソッドを検討する試み\_\_コンテポラリーアートエディケーション研究の一環として\_\_よしだ／浜田研究室に加えて、現代美術論評活動に地域国際展についての文言も多い星野研究室がチームを組み、学生作品の指導にあたった。



ここでは通常の大学課題と違い、縛りが様々なりアルを運ぶ。野外・ポール・時間の拘束、チームでそれらを運営していくこと、野外国祭展での発表に伴う作品維持の責任、と現場力を培う様々な要素がある。8月までの三ヶ月をその制作期間とした。

金箔を使用する博士二人の作品においてはカタニ産業の協賛を受けた。その仲介に、安江金箔工芸館館長川上氏(本学名誉教授)／よしだが交渉にあたった。





## 企画7 茶会、茶道具、その周り

風炉、釜、茶杓、折敷、蓋置共に金沢地元金工作家の「左右」竹俣勇壺。棗（中継）（のちに水差し蓋なども）を池田晃将（本学工芸科漆コース大学院出身）が受け持った。

いずれも表現物そのものではなく「観客の借景と孤独の時間」を作品の中心にすえるために、個々の表現を極限まで簡素な表現を心がけた新作である。

また、茶菓子も和菓子処はやしの協力を得て、「波観の話名（なみのはな）」と名付け、難しい青を用いて木の浦の海を借景するガラスの床の間をイメージしたオリジナル茶菓子を製作。

波を観る孤独の時間、自らの対話を名付ける\_\_コンセプトを、木の浦湾で冬期にみることのできる「波の花」といわれる自然現象に当て字をしたタイトルである。

学生の茶会スタッフ希望者は、計6回あった茶会のために抹茶の立て方や作法などを体験学習する機会となった。

実際に先輩である作家に現場であうことは大きな意味がある。茶を知らなければ道具を真には作れないし、道を外して作ることもかなわないと現場で学生が体感することは大きな収穫となったろう。茶を知らない人間の作る茶匙は茶がすくにくい。それでもあえて外すことで、作品が観客や使うものに新たな気づきをもたらすこともある。より茶に近くなることもある。そして、極端に表現を削ぐことで、それ以外のことを示す力も持てる。

茶を知るのではなく、作品の物質性の持つ力を知ることができるのである。



## 企画8 ポータブル茶室、イベント企画

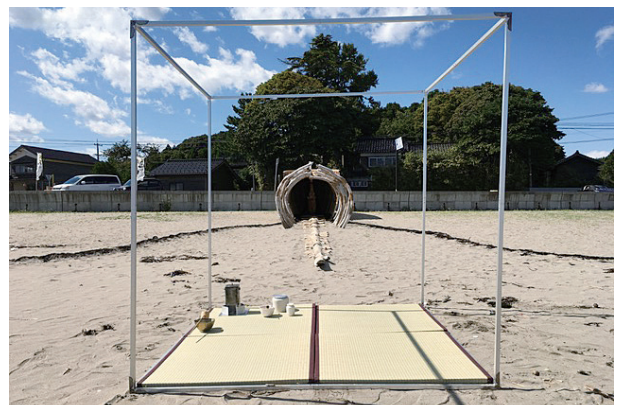
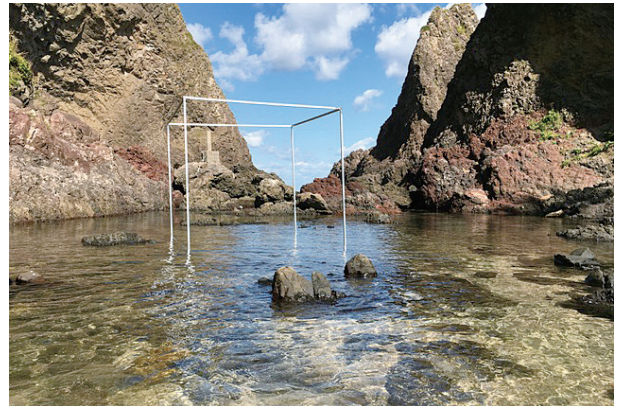


持ち運べる茶室としての野点や茶箱の世界を次のテーマにしようとしていた竹俣と、茶道という思想を元にした着想を出発点として同じく2006年より美術会場としての結界として茶室を採用し発表してきたよしだ（[The Dawn of meaning\_\_意義黎明] Gyoko YOSHIDA,2006,BTAP,Beijingなど）は、共にキノウラミーティングの「ポータブル茶室」をスピノフ作品として構想し、決行した。

本番ではゲリラ茶会及びインスタグラムに向けての撮影会を（県と市、各会場作家に許可を取って）各所で演出した。茶会には参加しにくい男子学生などはこちらでインターンを体験することができた。



また、このポータブル茶室については(このレポートでは述べない)②宮崎でも、東京芸術大学林教授製作の石の茶碗とコラボ展示し(五ヶ瀬川リバーパル、宮崎、2017年)、東京画廊ギャラリスト山本豊津氏を招いた茶会、地元の子供達の茶会を行なった。その他、キノウラミーティングとして金沢市茶屋街で「さいはての茶室\_その意味のはて」と題し、スピノフ展示を行った。(HAAG、石川、2018年)





## 備考

この様なプランのスムーズな実施にあたっては地元の協力が不可欠となる。この点において特筆すべきなのは、KINOURA MEETINGでは地元でのネゴシエーションやコーディネートを元金沢星稜大学教授（経済地理学 文化経済学学者、金沢市生まれ 珠洲市二拠点居住）である澤氏にご協力をお願いし、円滑な進行が望めたことである。澤氏は過去に、「珠洲市地域情報化マスタープラン策定委員会」委員長（平成16年度）「農水省・田園空間博物館整備地方委員会」委員（H11-13年度）など多数を歴任し、芸術祭が行われた会場地元に着している。



今回上がったメンバーの多くが、2014年から2016年の間に、2017年実施の下地をつくって、滞在研修や会議を毎年現地で開く等のコンセンサスを取りながら、交流を深めてきたメンバーである。

今後の文献化においては、プロジェクトやアートインレジデンスの教育体制の中でのポジショニング、大学におけるコンテンポラリーアートエデュケーションを大学教育のみならずコンテンポラリーアートの史実や地元との連携教育などの現状から長期的な考察を試みる。



## 附記

平成29年度特別研究に応じて記述された。内容については申請書類などで前もって書かれたよしだ自身の文章をベースに、実際の記録を加味している。

- （よしだ・ぎょうこ 日本画専攻／現代美術）
- （かみたに・よしお 芸術学専攻／銅版画）
- （はまだ・しゅう 彫刻専攻／金属彫刻）
- （ひらつか・せいこ 大学院／ファッションデザインコース／モデリング）
- （ほしの・ふとし 芸術学専攻／美学）
- （むらやま・ひろこ 大学院／ファッションデザインコース／デザイン）
- （やすい・あゆみ 芸術学専攻／西洋美術史・版画史）

（2017年11月7日 受理）

